69
分枝 branching 13
http://branching.jp
ブランチング 14 発刊 2015 年 9 月 9 日
ブランチング 15 発刊 2015 年 12 月 9 日
ブランチング 16 発刊 2015 年 3 月 9 日
お問い合わせ・入稿先　system@branching.jp

キッチン (三)

Yui MIFUNE 1972 ~
三船ゆい

余韻

－神様から贈り物としての－

ひたる
しふく

酒宴が終わったあと

つづく

三船ゆい Yui MIFUNE 1972 年生まれ
長野県山ノ内町在住　主婦

洋楽 yougaku

Kazuya OSAME 1971 ~
納和也

家居　ie 居　イエイ
へ併　へ併　ヘイ
ぺるそな
ぺるそなが涙を流す
とろぴかる間間 mama とろぴかる間間 mama
歯ワイ ハワイ 号　業号　ゴー
プレス加工
べいび
ナッシングナッシングナッシング no no no
ナッシングナッシングナッシングナッシング
脳 ノウ ノウ 米美 米美 baby
僕は眠れないんだよ
だけどペニスはペニスはペニー
sky　sky　sky
君へ white rain
君へ white rain
君へ white rain
甘い white rain
ホワイトシャワー　ベイビ
テレビの君へホワイト rain
愛ラブ you 愛ラブ you
woo woo woo
愛ラブ you 愛ラブ you
woo woo woo
woo woo woo
woo woo woo
to you
家居　家居　ふう
へ併　へ併　ヘイ
ぺるそな
ぺるそなが涙を流す
とろぴかる間間とろぴかる間間ママ
歯ワイ ハワイ 号　業　号　ゴー
プレス加工
べいび
ナッシングナッシングナッシング no no no
ナッシングナッシングナッシング
脳 ノウ ノウ 米美 米美 baby
米美　ベイ美　ベイ美
僕は眠れないんだよ
だけどペニスはペニスはペニー
sky　sky　sky
君へ white rain
君へ white rain
君へ white rain
甘い white rain
ホワイトシャワー　ベイビ
テレビの君へホワイト rain
愛ラブ you 愛ラブ you
woo woo woo
愛ラブ you 愛ラブ you
woo woo woo
woo woo woo
woo woo woo
to you
foo i love you
oh oh oh
foo i love you
oh oh oh
僕のコノ愛 ilove you
oh oh oh
to you
black night to you

納和也 Kazuya Osame クリエイター
1971 年埼玉県熊谷市（旧妻沼町）生まれ
http://osamekazuya.com

お百度

Shigemichi BINNAKA 1941~
備仲臣道

いつものように少しの酒を飲んで横になったが、いっこうに寝つけない。熱気によどんだ部屋の布団の上で、あちこちへ寝返りを打つうちに時間が過ぎて、もう辺りの気配は真夜中のようである。

目をつぶっても闇の中に浮かんでくるのは、今日の午後、病室で見た息子の姿ばかりであった。このところ快方に向っているかのように見えた息子の容態だったが、昨日から熱が高くなり出し、首の動脈と脇の下や股の間に氷の袋をはさんで、さながら氷漬けのようにしているのに、いっこうに熱の下がる気配が見えなかった。点滴や栄養を注入するものや、脊椎の脇に指してある痛み止めのパイプ、さらには尿を排出するための管などがベッドの上下左右を走って、息子はそれらでがんじがらめにされているかのように見えた。

三カ月前に入院したとき、すでに末期であると宣言されていたがんは、腎臓、肝臓、肺からリンパ管に至るまで、ほしいままに転移していた。病名を知らされていない本人はげっそりやせて青白い顔こそしていたが、まだ食欲もあり、なによりも病気と闘って治そうという気力が充分にあった。

原発の病巣を切り取ったあと、薬物を注入して転移した部分を小さくしていき、注入するものの量が致死量に達しないぎりぎりのところで、残った病巣を切り取るという方針が採られた。

まず鎖骨下の静脈から入れた栄養によって顔に血の色を取りもどした息子は、その分だけでも元気に見えた。だが、最初の薬物注入で頭髪がいっぺんに抜け落ちたため、彼は自分の病の尋常一様でないことを悟ったらしい。薬物注入時は非常な違和感があって、体のどこかにさわられるのも苦痛であったようだが、それでも歯を食いしばり、目じりに涙をにじませても弱音を吐くことはなかった。副作用のひどさは言語に絶するもので、嗅覚が過敏になるため食物は悪臭を伴うものに変わり、口を入るのは果汁や紅茶だけになってしまった。

それでもやがて肝臓の病巣が消え、肺のものも小さくなっていったころには、周りの者ばかりか本人も、退院する日の遠くないことを信じた様子であった。見舞いにきた友人とも何時間にもわたって話をし、彼が帰る際には諸々のパイプを外し、車椅子に乗って玄関まで送っていったほどである。

それが、病魔は反撃の機会を狙って油断なかったらしく、二、三日前から腎臓の数値が異常を示しはじめた。その機能が不全になり、もう一ヵ所どこかの臓器に打撃があるということにでもなれば、生死の境界線を大きく向こう側へ越えかねないとあって、医師も看護婦もみな必死であった。

病室に見舞いにいっても、声をかけてやることのほかにできることはなく、親とは言いながら、その非力が恨めしいばかりにこの身を削って、とてものことにいたたまれない。つきそいの妻に目配せして病室を出たのは、午後もかなり遅くなってからであった。

夏がけをはねのけた布団の上に座って、薄暗い電灯の下で腕組みしている自分に気づき、あれからこの時間までなにをしていたろうと考えても、まるで記憶にないような時を過ごしていた。不甲斐ないまでの自分が口の中に苦かった。

時計を見ると午前一時を少し回っている。すっと立ち上がりはしたけれども、なにをしようと思ってのことだったのか。そのとき、そうだ宮参りだ、氏神様にいって祈ってこよう、それ以外にたったいまできることはないのだと思った。

顔を洗って身支度を整え、寝息を立てている娘たちに気づかれぬようにそっと家を出た。寝る前に飲んだ酒が､頭のどこかにしこっているようであった。

氏神の八幡宮まではそれほど遠い道のりではない。月も人影もない住宅街の原稿用紙のます目のような道を、自分の足音を聞きながら歩いた。時々、犬が吠えると、ずっと遠くのほうまで何匹かがそれに和しているようなのが気味悪く思えた。

古墳のある公園を過ぎて左へ曲がり、右へ斜めの道をいくと、前方に黒々とした森が見えるのが八幡宮である。社地の脇の道を玉垣に沿っていく辺りから、右左も判らぬような闇の中に踏み込んだ。確かこの辺と思う所を左に曲がると、闇の中に随身門の屋根とおぼしき分厚いカーブが見えはじめたころから、少しは目がなれてきたようであった。

門をくぐって拝殿へ続く石畳の道が、両側にたくさんの石燈篭を従えて伸びているはずである。じいっと瞳をこらしていると、闇にも濃淡が現われてきて、思わずぎくっとしたのは、門の闇の中に一人の男が立っていることであった。そう気づいてみるとやがて男の息の音がかすかに感じられてくる。そうして、石畳の上からは、かすかな、あるかなしかの忍んだ足音がひたひたと伝わってきた。

言い知れぬ恐さに身がすくんだが、こんな時間にここまできたのだから、拝殿までいって祈って帰ろうと思った。一歩踏み出したとき、さきほどの男が、あっと叫んだようであったが、気配だけのような気もした。すると、後頭部の短い髪の毛が一本残らず逆撫でされたように立ち、そこから異様な冷たいものが背中へと降りていくと思えた。

石畳の上を拝殿へ進んで数歩いった辺りで、こちらへ歩いてくる人影が見えた。中年の女である。どうやらはだしらしいその女は髪を振り乱し、胸の前に合わせた手は一本一本の指を組み合わせて、両方の人差し指だけをまっすぐに伸ばしていた。すれ違ったあとも正面を向いたままで、わき目もふらずに門の闇の方へ向かっていった。

拝殿の前にたどり着いたころには目がはっきりとしてきて、賽銭箱の格子の一本一本が見分けられるほどになった。ポケットから出した千円札を一枚、その間に滑り込ませた。そうして、気づいたのは、深夜の宮参りの作法を知らないということであった。人目を忍ぶとは言え、音のしないように柏手を打つのは不吉に思える。それは葬儀のときのやり方だからである。しかたなく、ただ手を合わせて全快を祈るだけにした。

そうして頭を垂れているところへ、背後からひたひたと迫ってきた足音が、賽銭箱の前まできて並んだ。さきほどの女がもどってきたのであるが、彼女は指を組んだ両手を胸の前でしきりに上下させては、口の中でもそもそとなにかを唱えていた。上半身全体がかすかに震動している。やがて両手の間にはさんだものを賽銭箱の上に置いた。伸ばした人差し指と思ったものは何本もの竹の串であることが、すっかりなれた目に確かに見えた。見ると賽銭箱の上にはすでに何十本はあろうかという串が並べてあった。

再び胸の前で両手を上下させて口をうごめかせていた女は、やがて拝殿へ背を向けて、ひたひたという音とともに門の闇のほうへ消えていった。はじめて見たのであるが、これがお百度参りなのであろうと思った。そのときまた、後頭部と背筋を冷たいものが突き抜けて、立っているのがやっとの思いであった。体の芯からなにかが抜けていくような気がした。

それからどうやって家まで帰ってきたのかを、まるで憶えてはいない。気づくと雨戸の隙間が白々としていた。一つだけ記憶しているのは、八幡宮を出ようとしたとき、闇の中にいた男に焼けつくような目でにらみつけられたことである。その瞳は火を放ったように金色をしていた気もするけれども、まさかそんなことはなかったのだろう。

それから三日たった明け方、息子は病室のベッドの上で、力尽きたボクサーのように四肢を投げ出して動かなくなってしまった。敗血症を起こして呼吸ができないまでに、病魔は彼を苦しめたあげく、現代医学の手の届かない向こうへ連れていってしまったのである。苦痛がくっきり刻まれた彼の顔は、見知らぬ若者に見えた。

葬儀を終え、気の滅入るようなあれこれをこなして、ぐったりとした身を呆けたように夏の気の中に過ごした。それが何日間であったか、考えるのも億劫であった。

そんなある日、よんどころない用事があり一人で出たあと、帰り道の都合で八幡宮の前にさしかかった。境内の石畳の上を、一組の夫婦が息子さんと思われる若者を中にはさんで、拝殿へ進んでいるところであった。その夫婦が、あのお百度参りの人たちだとは、なぜか知らないがすぐに判った。察するにあの夜のことは、いま抱きかかえるようにしている、この若者の病気回復を願ってのことだったのかと、一人で合点した。そうすると、あの息子さんは、お母さんの無心の祈りの力で助かったのに違いなかった。

「よかった」

そう思うと、自分の祈りの至らなさが身を苛んで、その場に立ちすくんでしまいそうに体中の力が抜けた。

そのとき、若者がこちらを振り返った。わが息子の顔であった。

備仲臣道　Binnaka Shigemichi 1941~
韓国忠清南道大田生まれ 著述業
甲府第一高等学校卒　山梨時事新聞記者　月刊新山梨編集発行人
2006 年、第 6 回内田百閒文学賞優秀賞受賞
著書 『蘇る朝鮮文化』（明石書店）
『高句麗残照』（批評社）
『司馬遼太郎と朝鮮』（批評社）
『ある在朝日本人の生涯』（社会批評社）
『内田百閒文学散歩』（皓星社・2013 年 8 月）ほか 5 冊。
kazenonagune@yahoo.co.jp

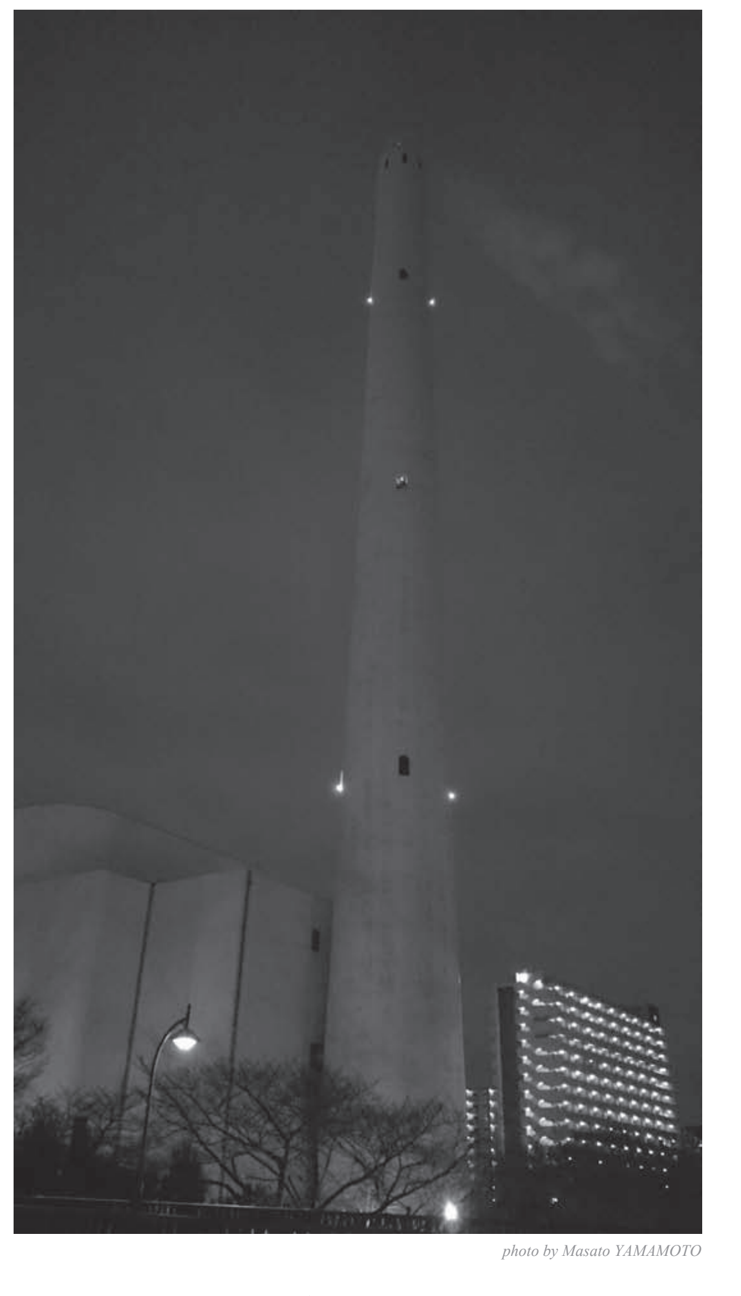


photo by Masato YAMAMOTO

知らない事が多すぎる

Masato YAMAMOTO 1976 ~
山本正人

胸の中が、こそばゆいというか、
心地良い締め付け感に襲われる。
みぞおちの少し上の辺り一帯の細胞を、
ストローで勢いよく吸われるような。
直後に、
目の下から鼻の奥ら辺りに、
内圧が上がるような違和感が続く。
そのうち、見えている景色の輪郭がぼやけ、
変に色鮮やかな、今までより強い色調の世界に変わっていく。
ここまで来ると私は、
ふと自分を落ち着けようと、深呼吸をし始める。
恰も、男がそれを人に見せてはならないように。
先日、仕事で東京まで行く用事があった。
毎度の事ながら「楽だし速いから新幹線で行こうか」とか、
「安いから高速バスにしようか」といろいろ考えるのだけど、
結局、練馬まで車で行き、そこから電車を使うのが通例だった。
日々、騒々しい子供達の中で暮らしているからか、
車で１人運転しながら思考を巡らすと
ほんの数時間だが、とても有意義で実のある時を得られるからだ。
何はともあれ、いつも
高速から練馬インターを降りて右手にある
西武線の石神井公園駅から電車に乗り、目的地に向かう。
ただ、向かう先は決まって池袋からの乗り換えが必要で、
私のような田舎者にとって、
池袋駅の複雑に入り組んだ構造は不便で仕方なかった。
だから今回は事前に、
もう少しいい経路は無いものかと探してみると、
都営大江戸線の“光が丘駅”というのが近くにあった。
そこで今回は別ルートを使ってみる事にした。
実際に、光が丘から乗ってみると
案の定、便利な事この上なく、
ただ乗っていれば目的地まで直行してくれる具合の良さだった。
「今度からはこの駅を使おう」と、
長いこと悶々としていた難しいパズルが解けたかのように
得意げに思う。
一通り用事を済ませて帰る頃には、すっかり日も暮れて、
電車は会社帰りのサラリーマンや OL で、きゅうきゅうにひしめき合っていた。
一心不乱に携帯を眺める人、
体をくの字に曲げながら本を読む人、
周りに押されながら知人と笑顔で会話する人など、
いやはや逞しいなと尊敬してしまう。
目のやり場に困って、
つり革広告を見ているのなんて私だけなんじゃないか。
顔のすぐ横に、見知らぬ人の呼吸を感じながら
こういった満員電車は何度経験しても慣れないなと愚痴をこぼしつつ、
車が停めてある光が丘の街に着いた。
車内の窮屈から解放されてほっとすると、
おもむろに空腹を感じ、そういえば昼頃食べたサンドイッチから
何も食べていなかったのを思い出した。
「駅の周りで何か食べていこうかな」
練馬インターはすぐだから
高速に乗ってサービスエリアで済ませても良かったのだけど、
それでは何か味気ないと思い、
どこにどんな店があるのかも全く分からずに
とりあえず、車の停めてある方向とは真逆に歩き始めた。
とはいえ、
こういう時ほど、入りたい食事処は見つからないものだ。
住宅地だから
ただでさえ食べ物屋が見つからないのに、
数十分歩いてやっと見つけた店も通り過ぎていく。
「ハンバーガー屋じゃなあ・・」
「このチェーン店、地元でもあるし」
そして、そのうち探すのが面倒になり、
３０分くらい来たところで諦め、車へと引き返す事にした。
同じ道を戻るのはどこか癪に触るからと違う道を歩きながら
途中で見つけた自販機の前で立ち止まり、
コーンポタージュで空腹を紛らわせる。
空は月も無く、どんよりしている。
「俺ってこういう事多いよな」と自分にため息をついた。
それでも道すがら
知らない街の雰囲気を少しでも楽しむように、
ここに住む人たちを、半ば当然のように想像していた。
というのも、周りの街並を眺め歩きながら、
何百メートルにも渡って大規模な集合住宅が立ち並んでいる情景に
とかく光が丘の異質さを感じていたからだ。
コーンポタージュの残りを一気に頬張り、
謎を解く名探偵さながら、気持ち新たに歩き出す。
目の前には、
一棟に１００世帯くらいは入るんじゃないかと思うような巨大な建物がいくつも建ち並び、
大きな公園や総合病院まで隣接している。
途中に見つけた住宅地図の立ち看板を見ると、
小学校や中学校が目と鼻の先ほどの間隔で
街の中に幾つも乱立していた。
「そうか、ここは計画都市ってやつか」
都会の暮らしと縁のなかった私にとって、
光が丘のような計画的に作られた、
加えて特大の街はかなり新鮮だった。
ちょうど街の中央には、地面より一段高く
幅３０メートルほどのだだっ広い遊歩道がずっと続いており、
そこから公園や病院、集合住宅へと繋がっている。
そしてこの道はどうやら、
光が丘駅まで続いてるようだった。
「テーマパークみたい」
机の上で考えられた街だとしても
ここまで壮大なスケールに、ある種の感動すら覚える。
言っては失礼だが、
こんな蜂の巣みたいな環境に住む人ってどんなだろうと
異国へ来た旅人の如く、好奇心に駆られた。
遊歩道を進んでいくと、ふっと眼下に、
高層住宅群の狭間で木々が茂るオアシスのような公園を目にする。
そこに目を向けると、
若者達がスケボーで飛び跳ねたり木陰のベンチで肩を寄せ合っている。
薄暗くて顔は見て取れないが、
仕草や声のトーンからして中高生くらいだろう。
それを見て急に、
寸刻まで浮世離れした空間をイメージしていた私は、
生々しい現実の世界に引き戻された。
「生活、してるんだよね」
その瞬間から妙な好奇心は消え、
より身近で肯定的な想像に身を委ねる。
もしかしたら、
まるで兄弟みたいに何年もずっと一緒に遊んでる友達とか、
「あいつ、今度引っ越すんだって」とか、
Ｂ１２の○○君とＤ５の○○さんが付き合ってるとか、
「とうとう結婚だってよ」とか。
光が丘で営まれているかもしれない命のふれあいを、
勝手にもほどがある程
いくつもの人模様を頭に描く。
すぐ脇にあったベンチに座り、
夜のオアシスを眺めながら、自分の過去と重ねていた。
恥ずかしいかな、
気になっていた女の子を初めて映画館に誘い、
その夜の帰りに、公園のベンチで振られたこと。
酒に酔いながら走り回って馬鹿笑いし、
芝の上に倒れて夜風を感じたこと。
「よく親に叱られたもんな」
そこでハッと気付く。
あ、そうか、
自分の子供達もこうやって青春を謳歌するのか。
何事にも代え難い息子や娘の未来を想像するうち、
いい思い出と思っていた我が身にどこか気まずさを覚えて、
一刻も早く家に帰りたくなった。
そこからは脇見もせず自然と足早に歩いていた。
やっとのことで車まで辿り着き、
エンジンを掛けながら思う。
我が子を叱るこの頃の自分の姿に
滑稽さを感じずには居られなかったのだ。
伝えなきゃいけない事は、杓子定規な言葉じゃなくて、
そういう事だったよね。
最近、もうすぐ３歳の息子が、
私のあぐらの上にちょこんと座るのが愛おしくてたまらない。
恰もそこが自分の特等席のように。
３０年以上も前の、私の朧げな記憶の中にも、
野球を見ながら酒を飲む親父の懐に入り込んでいた温もりが残っている。
印刷屋をしていた親父のインクの匂い。
「無事に帰ろう」
確かめるようにシートベルトに手を回した。

山本正人 Masato Yamamoto 1976~
群馬大学教育学部卒　長野市在住
IT

---

hello! spring

Orie MIYAZAWA 1984~
宮澤織江

photo & work by Ikue MIYAZAWA

今年の春は曇り空だった。
やっと長野の桜が満開になった頃、
私の恋が終わった。
社会人になってからは、始まりと終わりが分からない。
社会人１年目の頃、
グレーゾーンが増えることは大人の証だと思ってた。
本当にそうかな？

終わりを告げた日は、
目が腫れない程度に泣いた。

翌日には、友人に思いの丈を話して、
完全に『過去のもの』とした。
友人と思い出を照らし合わせてみると、
多くのことを忘れていることに気付いた。
あんなに大好きだと思っていたのに、忘れている自分が悲しかった。

翌々日には、達成感と開放感でご機嫌な自分がいた。
あんなに苦しんだのに、ご機嫌すぎる自分がまた悲しかった。

誰かと共存することは労力がいる。
労力をかけ続けると、それが習慣になり、
愛着や執着がわいて大事なものになる。
それから、お互いに幻想を抱いたり、現実に引き戻されたりの繰り返しだ。
誰かに労力を注ぐことって、自分の生きる価値を見出す作業でもある。
生きる力になる。
ある程度の依存関係は
幸福感を味わう為の１つの方法だ。
私も十分それを味わった。
けれど１人になって、自分の心を感じることも同等の幸福感がある。
この２つの幸福感は相反する。

誰かと共存したい気持ちと、
自由への欲求は折り合いがつけられるのだろうか。

そんなことを思うと、
やっぱりまだ苦しい。

宮澤織江　Miyazawa Orie
1984 年鹿児島県生まれ
長野県長野市在住
会社員
宮澤郁江 Miyazawa Ikue (写真作品)

---

information
トポス高地 2015
6 月 丑山直樹　7 月 松田朕佳　8 月 川合朋郎
アリコ・ルージュ / 飯綱東高原
http://toposnet.com

未来道標

Nami GOTO 1969~
ごとうなみ

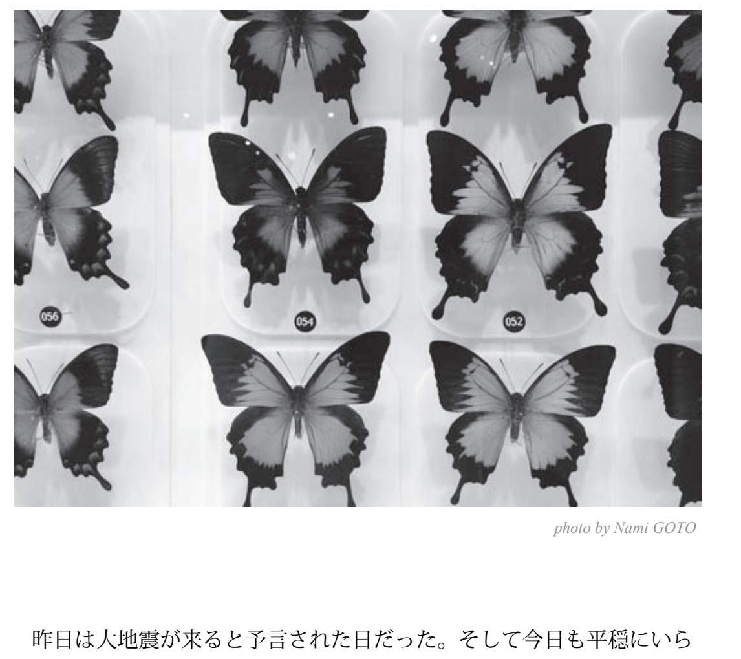


photo by Nami GOTO

昨日は大地震が来ると予言された日だった。そして今日も平穏にいられる。

昨年秋から続いた息子の不登校は、春になり、山深い森の根元の融雪の速度で解けようとしている。冬山が晴れれば澄んだ空気が光を拡散し少しずつ幹を温めてほぐすように、太陽は知らず固まった息子の緊張の心体に、焦燥の罪悪感と闘う昼の間いくつもの問いを投げかけたに違いない。その問いに自身で幾度となく答えを出してきた彼が、ふいに「春」というきっかけをつかみ、冬の身の冷たさに気付いたのだろう。春は彼に選択を促し、環境を自ら整えさせた。彼の側で寄り添うこともできずただ闘う事しかできなかった私も、その春に救われたと思う。瞳に光がある息子の顔を久しぶりにみた。

私は幼少の頃からずっと闘ってきたのだとその女性と話すうちに気づいたのは、久しぶりの再会を過ごすお好み焼き屋でのことだった。画業を志して以来、高く精神の拠り所を求めて 40 年を過ごす彼女の話を、出会って幾度か聴いている。私よりも十も年上の彼女の生き様が私の未来の延長線上にあるような気がして、尚更彼女の過ごした瞬間やら感覚やらの話へ自分を疑似体験させていたところもある。全体像の見えない暗中模索する日々の詳細なできごとを私は俯瞰しながら聴き、彼女の選択によって浮かび上がる人生の軌跡をなぞった。翌朝、彼女もまた闘い続けているのだと朝食を囲みながら思う。闘うことで自身を支えて来たのかもしれない。現実の節々に滲む彼女の感情の起伏はきっと激しいことだろう。団塊世代のただ中に女手でひとつで子を育て上げた環境には、表沙汰にはされない醜悪な男尊女卑があったことは、私にも想像できる。けれどその都度自身の感情を丁寧に救い上げ、自分以外の誰も傷つかない方法で処理しようとしている彼女の幼気な清貧さを、私は見過ごすことができない。「傷ついた自分を修復する手段に絵画や虫達があるかもしれない」と彼女は言う。十数年前に信州青木村にある小さな昆虫館を任されて以来ほぼ一人で膨大な資料を整理し、虫達を観察し、観察会や講演会などの企画を入れながら運営してきた。鬱蒼とした森の中に本当にひっそりと建つそこへ、私もこども達を連れて一度行ったことがある。その日はコンサートも開かれていて、夏の避暑に最適な気温の中、ロビーから聞こえてくる音楽を背後に展示されている資料の数々を見て回った。別室には彼女の描くドローイングが詩人田中清光の言葉と共に展示されていた。そこには、たったひとりの自分自身で在り続けることから目をそらさない証のような敏感な線が、画家の抽象をかたちづくっていた。世界に身を投じる彼女そのものが額装でまとめられていたが、森に蠢く虫達の気配と共鳴したその絵は、動いているかに視えた。いったいどれほどの悲しみや憎しみや恨みや悔いや懺悔が、この中に含まれているのだろう。説明のしようなどない個人的な刹那が、只管線の塊となって生まれたての脆弱を纏いながら目前にさらされている。彼女のドローイングを前にわたしは身動きが取れなかった。

「（前略）館内に設置された大型のガラスケースに、ギフチョウの羽化が見られるように展示してあり、蛹から出てくる蝶、出たばかりの蝶の様子を食入るように見ていた私が居ました。羽化の様子や、立てた枝を伝って登り、翅を乾かし拡げて飛び立つ様子など、ケースの中の一部始終を記憶に任せて真似た次第。蛹を掌に載せて「先生、これがね、」と指を指した瞬間、目の前で瞬時に羽化。白川先生の瞳は大きく見開かれ、すっかり昆虫少年そのもの。その時に放蝶したチョウたちは桜並木に舞い上がり、1 週間ほどのちに戻って来てたくさん小さな卵を産みました。卵は幼虫となり葉を食べ尽くし、食草ウスバサイシンの茎の先端にしがみついてひもじさを訴えるので、山を這いつくばって探すもそうはなく、アオイ系のものを採ってきて植えてはみたものの口に合わぬと。ようやくウスバサイシンを植えたのですが、時遅しだったのかさほど食べぬうちに大半がいなくなり。どこかで無事に蛹になって、自然羽化してくれるよう祈るばかり。わずか保護した蛹は今も寒い館内で越冬中。はたして 4 月中旬以降にいつものように羽化してくれるかどうか。厳寒の森でじっと春を待つ蛹たちを想いながら山の麓で過ごす冬。（中略）真っ暗になるまで外で遊ぶしか居る場もなかったとも言える時代、こどもは五感も六感も働かせて遊び呆けていました。季節ごとに蝶は舞い、暮れゆく蒼い空が次第に茜色になり、紫になり、金色の雲が黒くなっていくのを恐ろしげに見ながら、私の内にも物語は沢山生まれました。その日々が、のちのちにどれ程自分の情けなさや苦境を慰め、勇気をわかせてくれたことかと想います。そんな幼少期を過ごした世代は幸いかもしれません。」（信州昆虫資料館報 No.13 昆虫資料館の窓辺にて より抜粋）

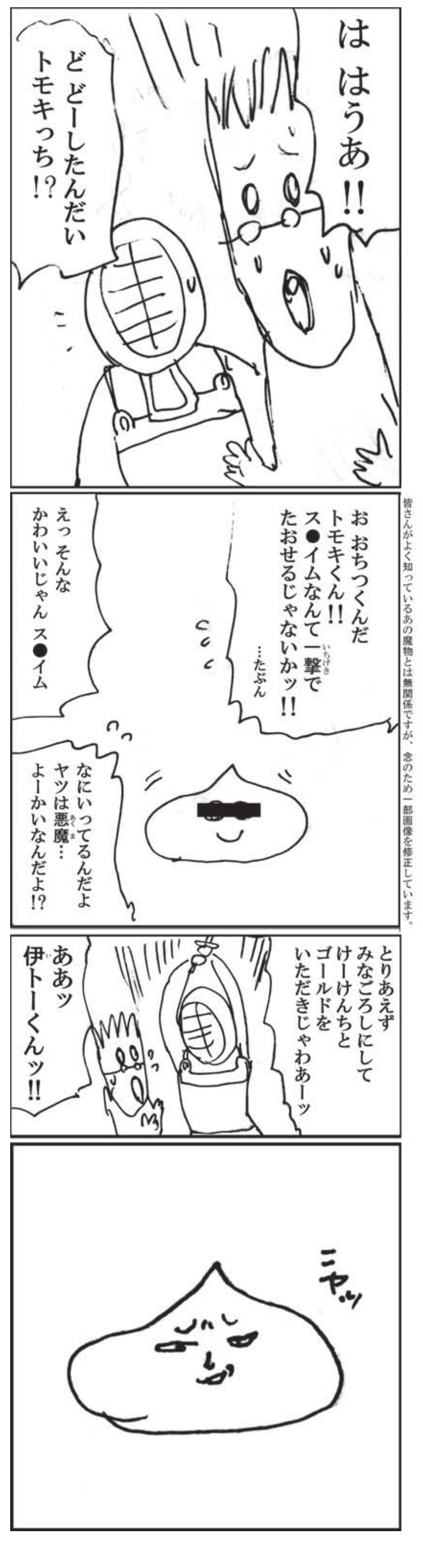
雨上がりの湿った森に、苔むした岩陰に、人間世界から紛れるように存在する虫たち。そんな小さな一生を彼女は何年も見続けている。虫達に向けるまなざしの先に、宇宙や自分を投影する瞬間は沢山あるだろう。大きさではない自分と同じ命としての重み。自然界の仕組みもその手に触れて感じ取る。「このところ弱っている蝶の幼虫が持ち込まれたので家に連れ帰り、一緒に過ごしています。毎日新鮮な食草を求めて奔走していますが、ちゃんと大きくなれば蛹になって越冬。来春は蝶になります。問題の前で逃げずに座り続けるのは時に消化不良を起こしますが、自然界のさまざまに助けられながら、一日一日生き終えることでひらけていく道もあるかもしれません。先日、昆虫館のある山の頂上まで登ってきました。青空に映える紅葉をかいくぐり、汗だくになっての眺望。降りて来たら心身すっきり。代謝がよくなって思考回路も流れはじめたとすれば結構単純な生き物で、心身まさに繋がっているなあと。少し自分が好きになりました。ゆっくりやっていきます。お米沢山貰いましたので今度娘のところに持参する時になみちゃんにも持参します。走ったり転んだり這い上がったり、生きるってそういうことのようです。」時折交わす彼女とのメールには生を達観する文脈が息づいている。月明かりのような彼女の存在は、樹陰に宿る価値を照らし出す光だ。

久しぶりに受けたテストが思いのほか悪くなかったと照れた顔で息子が報告する。見てみるとほんとだ０点ではない。たとえ０点だとしても私は驚くどころか怒りもしなかっただろうが。夕飯を食べながら話しを聞けば、授業を受けた箇所の問題は空白ではなく何かしら答えが書かれてあった。残りの分からない記号問題は山勘を試したと言い、その見事な外れ具合にふたりで笑った。「勘は鍛えておかないとね」と母としての教訓を伝授する。それを受けた彼の嬉々とした声の抑揚が喜ばしい。そんな息子との会話にふと、私は自分の体とは闘っていないことを覚った。私は体を信じている。思考より身体の反応を優先する傾向がある。体の反応や反射は意思や努力でどうするものでもないから、まったくそれに任せている。これが私がほとんど風邪もひかない秘訣だとすれば、もう私は、自分自身とさえ闘わなくていいんじゃないだろうか。

ごとうなみ　Nami Goto
美術家
1969 年生まれ長野市在住
http://nami-goto.jimdo.com

アートと思考 第⑫講 あたかもアートの終焉が世界の起源であるかのように

Yosuke HATTORI 1976 ~
服部洋介



ど どーしたんだい トモキっち!?
は はうあ!!
えっ そんな かわいいじゃん ス●イム
お おちつくんだ トモキくん!! ス●イムなんて一撃で たおせるじゃないかッ!!
…たぶん
なにいってるんだよ ヤツは悪魔…よーかいなんだよ!?
とりあえず みなごろしにして けーけんちと ゴールドを いただきじゃわあーッ
あぁッ 伊トーくんッ!!
ニヤッ

皆さんがよく知っているあの魔物とは無関係ですが、念のため一部画像を修正しています。

石原莞爾あたりがいうように、技術革新によって水と空気からすべての原料とエネルギーが得られるようになり、また機械が必要な仕事をすべてしてくれるような〈労働の終焉〉が到来したと考えよう。デリダは〈労働の終焉〉と、聖書における〈世界の起源〉、すなわち、人類における労働以前の黄金時代を結びつける。しかし、同時に、「労働のない世界、あるいは世界に属さない労働というものを想像することは、常識では困難である」(1) とも言っている。リフキンは、第三次産業革命の結果、世界の需要をまかなうために必要とされる労働者はますます減少し、大量の失業者が出ると危惧している。いや、究極的には仕事しなくていいんだから、あとは遊んでればいいんじゃないのって話だが、そうはならない。働いて金を受け取る必要がなくなれば、金持ちのいいなりになる必要はない。しかし、マネーを通じて権力を振るってきた人にとっては、困ったことになってしまう。EU のバスケット通貨 ECU の設計者の一人であるベルナルド・リエターは「（マネーは）使用者間で「協調」より「競争」を促進するように設計されている。お金はまた、工業社会の旗印である。「永続的な経済成長」を可能にした影の功労者であり、エンジンでもあった。そして、このマネーシステムにおいては個人が財産の蓄積（富の貯蓄）を奨励し、それに従わない人々は懲らしめられるようになっている」(2) とこれを説明しているが、世の中いくら文明が進歩しても仕事が減らない一因は、こんなところにあったわけである。なんて話だ。

ところで、アートも職業でやっていれば労働だが、労働消滅後の世界では、プロの絵描きがアーティストとか、そういう金銭を基盤にした区分は無意味になってしまうので、アートか否かを判断する方法は、多数決くらいしかない。より大勢の人が認めた作品がアート。なるほどって感じだか、これも「多数の人が好む作品」と「少数の人が好む作品」の区分でしかない。これらは、何らかの意味内容ではなくて、呼び名、名辞なのである。「あなたの作品は「多数の人が好む作品」と呼ばれるものです」という感じですね。ちなみに〈アート〉というのは、広義には、人間の創りだしたもの全般であり、海外でディプロマ取った人に「Art」とついてるからって、必ずしも芸術専攻じゃないんで注意。人文系の学位ってことですね。「Art」の前に「Fine」がついているかどうかのチェックをお忘れなく。

さて、人間精神の所産を扱う人文学というのは、論証的性格をもたない、つまりは、非実験的で意味解釈法によるところの学問をいうわけなのだが、文科省の学術研究推進部会には「人文学及び社会科学の振興に関する委員会」というのがあり、あわれ文科省からも時に科学とは扱われず、「はやく文理融合して、少しは科学になってね」って感じで見られているわけである。スーパーサイエンスハイスクールに対抗して構想されたスーパーグローバルハイスクールにしても、当初は「先進的な人文科学・社会科学分野」（一応は科学扱い）に特化したグローバル教育のカリキュラム開発を推進するとされたものが (3)、「そこ、いらないわ」ってことで当該文言を削除、世間の噂では、そのうち「文系教育は私学に任せて国立は理工と医学部を充実させよう」なんてことになるんじゃないかと、一部教員は戦々恐々だ。デリダ曰く「世界中で、〔大学にとっての〕主要な政治的掛け金は、どの程度まで研究機関や教育機関は支援されるべきか、すなわち、直接的ないし間接的に統制されるべきか、婉曲に表現するならば、商業や産業の利益のために「スポンサーをもつ」べきか、というものです。周知の通り、この類いの論理によって、〈人文学〉はつねに、学術の世界とは無縁な、収益性が見込まれる資本投資に関係する純粋科学や応用科学の学部のための人質となるのです」(4)。なんせ趣味みたいな学科が多いんで……。

また、人文系の諸学部は、人の好き嫌いでしかない〈価値〉であるとか、善、美、倫理、政治制度、ナントカ主義、ナンチャラ教みたいなものについても扱うわけですが、人のやることはコロコロ変わる上に、目に見えないものを扱う場合も多いので、それをいいことに、人間てのは「本当かよ？」というような解釈の体系を作り上げてしまうんだね。高校とかの国語のテストの解答を見て「それないわ」と思った人はたくさんいるはずだ（小林秀雄だってテストに出た自分の文章の意味がわかんなかったんだから）。だから理系の人に怒られちゃうわけなんですが、もちろん、自然科学といえど、それをやってるのは人間なので、そこに「安全」とか「危険」といった、中立的とはいえない政治的な名辞が登場すると、原子物理学において原発安全神話なるものが形成されるのもむべなるかな。

こういう〈ぐにゃぐにゃした現実〉というのは、逆に機械化がむずかしいので、かえって〈労働の終焉〉後も人間の領域として残っちゃいそうだね。「指鹿為馬」で「馬鹿」の語源説の一つになっちゃった秦の趙高みたいな奴が〈画廊のゴミ〉を持ち出して、「諸君、最高のアートを持ってきたぞ」と言いだしたらどうするか。そこで「それ、ゴミでしょ」と言った人が後日、首チョンパなんてことになったらたまったもんじゃない。実際、かの有名な〈便器〉がアートなんだから、他人事じゃないわけである。大阪の橋下市長が言うように、民主主義とは素晴らしいもので、今日び、こんなことで命を取られることはないが、かといって、〈個人の尊厳〉を基礎とし、思想も良心も言論も表現も自由なはずの民主主義にも〈公共の福祉〉と呼ばれる全体主義は含意されているわけで、よって、個人も自由も現前することのないところで〈民主主義〉なる語だけを使用している状況が現出しているわけである。かといって、すべてが成就したならば、それはそれでナニモノでもないナニかに違いない。したがって、薬が薬としてあるためには、自らのうちに毒をも含んでいなくてはならない、というわけだ (5)。

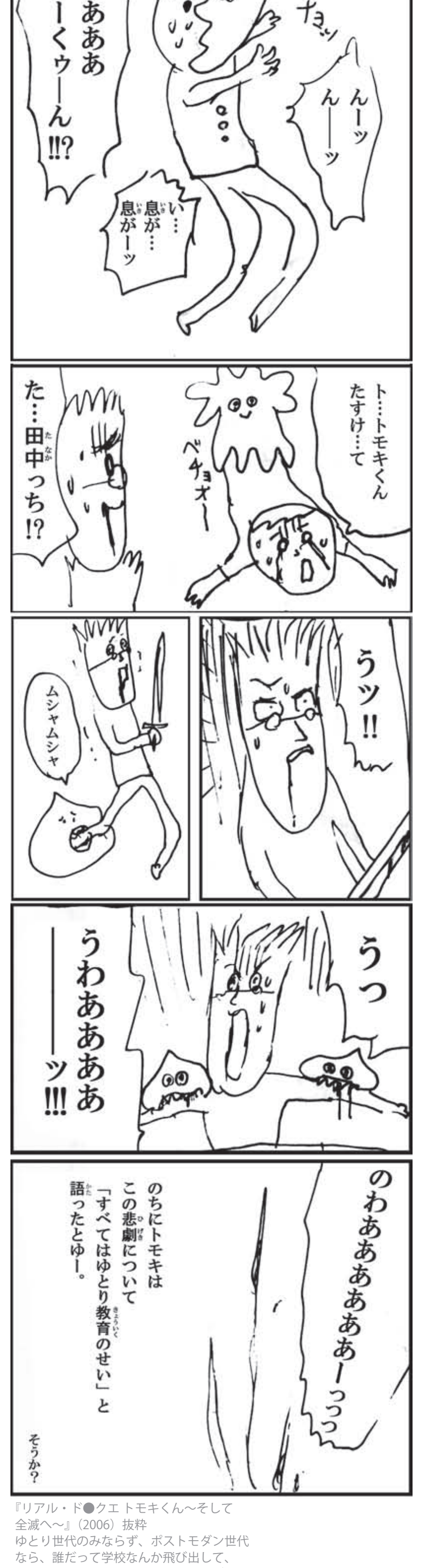
そういうわけで、アートも含め、何らかの〈価値〉があるとされる事物というのは、〈価値〉という名で呼ばれているが、じゃあ、〈アート〉とか〈価値〉とかいった名辞が何を意味しているかの境界線を定めるとなると、それ自体が暴力的な行為とならざるをえない。「芸術作品があるということ、我々は表象のうちにそれらを我々の前に〔眼前に〕もつということ。しかし、何によって芸術作品はそれと認められるのか。これは法的で抽象的な問いではない。歩を進めるたびに、事例が示されるたびに（…）、境界は「芸術作品」の「ある」と「ない」との間で、「物」と「作品」の間で、「作品」一般と一つの「芸術作品」との間で揺れ動く」（デリダ）(6)。人文学とは、まさにこの〈ぐにゃぐにゃの現実〉であるべきだというのがデリダの主張であって、人民が従うべき絶対の規範であるはずの〈法〉を、人民自らが改変してしまうような掟破りかつ掟自体が成就不能な関係こそが〈脱構築〉なのであり、ゆえに人文学は〈歴史〉と関わるのである。時や場所によって、掟の解釈や境界は変更されてしかるべきものなのだ。勢い、自分にとって不都合な解釈がまかり通っているなら、論争を吹っかけて新たな解釈を勝ち取るほかないという話になるわけだが、結局、最後は親とか上司とか政治家とか、怖そうなお方とかが勝つのが世の常、何とかならんものかね。

でも、こういうの、やな人にとってはやなんですね。かつて、日本病跡学会総会でヴィトゲンシュタインの『論考』が議論の俎上に上ったことがある。名古屋大学大学院医学系研究科で臨床系の研究指導を行う津田均准教授の一般演題発表『ヴィトゲンシュタインの哲学は精神病理学に何をもたらすか』がそれだ。前回、東大において精神分析がいかなる経緯で傍流化したかについて触れたが、名大の精神健康医学研究室では、構造主義哲学や精神分析を駆使して、精神病理学的なアプローチを続ける先生方が頑張っておられるのである。さて、研究史の流れにおいて、ヴィトゲンシュタインは統合失調症圏から発達障害圏のいずれかに位置づけられてきたのであるが、津田博士は『論考』に見るヴィトゲンシュタインの態度を発達障害と位置づけ、「物事の意味づけがむずかしく、他者の言葉などが〈ぐにゃぐにゃの現実〉に回収されず、それを論理空間に位置づけようとしてぎこちなくなるのではないか」(7) との仮説を提起された。一方、質疑応答では、「分裂気質ではないか」という指摘をめぐって議論が交わされたが、いずれにしても、「ぐにゃぐにゃの現実は嫌い」という人たちの一人であることに変わりはない（私もね）。なので、〈アート〉というぐにゃってる語も、ないと不便なのだが、あってもあまり使いたくないのは事実だ。もしくは、この際、ぜんぶアートでいいや。人文学は境界を変更する。かといって、「なんでもアリ」の相対主義だと批判されてはかなわんので、デリダも各領域の特殊性が解消されえないことを認める。境界というものは、それがなければ壊すこともできないからだ。構築されたものがなければ、脱構築することもできない。この奇妙な共依存によって、世界はどうにか存続しているようである。

〈世界の起源〉には、労働もなければ、争いも、苦しみも、いまだ存在してはいなかった。原罪とともに世界に労働が導入され、そして、人文学の〈歴史〉が幕を挙げたのである。その長い贖いの果てに垣間見る〈労働の終焉〉は、〈世界の起源〉を連れてくるのだろうか、それとも〈SEKAI NO OWARI〉を連れてくるのだろうか。石原の『世界最終戦論』では、〈労働の終焉〉の前段として、西洋覇道文明と東洋王道文明なるものの最終決戦が想定されている。結果、思想は統一され、世界はその〈起源〉、すなわち〈王道楽土＝エデン〉へと立ち戻るである。この〈来たるべき同一性〉は、到来したらしたでおかしなことになって、結局、到来したこと自体がぶち壊しになるナニかであると現代思想では教えられてきたが、ユダヤ教神秘主義では、そんなことにならないように、〈SEKAI NO OWARI〉は〈世界の起源〉に収縮すると説いている。「神は世界に顕われない」（『論考』6・432）がゆえに、世界が真の〈起源〉に到達するためには、形而上学的沈黙のうちに、論理空間自体が消滅しなくてはならないのだ。世界が始まっちゃっても終わっちゃってもヤバイ気配はぬぐえないので、アートってのも、世界を存続させるための必要悪として、当面ぐちゃぐちゃのまま存在し続けていただくほかないというような気もしてくるね。

バタイユの定式では、〈人間〉を作ったのは〈労働〉であるとされている。〈労働の終焉〉は、〈労働＝マネー〉の経済制度とともに構築されてきた倫理・道徳・秩序・規範・歴史の終焉を意味するのであるから、「豊かで寛大なポストモダン社会では、欲求は安易に満たされ、人間はディシプリン（規律）を失って動物化する」というようなことを言った本上まもる (8) は、この文脈からすると正しい。芸術の一つのイメージであるバタイユ的な〈消尽〉も、〈労働の終焉〉後の世界では、もはや〈破滅＝超越〉の意味をもたない。私たちの頃は、ドラクエやるにも、長い列に並んだり、他人を襲撃したり、学校サボったりと、それ自体が一個の社会問題の様相を呈していたが、今日び、学校へ行かずに部屋にこもってスマホでゲーム三昧なんてめずらしくも何ともない。「コイン一枚で東洋の王侯もうらやむ公共サービスが受けられる」といわれたローマ市民のようである。もちろん、安価に受けられるサービスの背後には、属州と奴隷たちからの搾取があったわけで、安けりゃいいってもんじゃない。食うに困ったゲルマン人を傭兵に使っているうちはよかったが、終いにはキレられて西ローマ領の大部分を乗っ取られてしまった。まさに世界の没落だ。あたかも労働が終焉したかのように見える世界の裏側には、まだまだとんでもない収奪の実態が隠されている。「大部分の人々は（…）仕事を求めていますが、仕事がありません。その他の人々は過剰な量の仕事を抱えていて、仕事の量を減らしたい、さらには、労働市場に鑑みてあまり割に合わない仕事とは手を切りたいと考えています」（デリダ）(9)。

一方で、真に〈起源＝楽園〉が到来したとしよう。ここでは、働かなくてもいいのに働いたり、我慢して貯蓄したりする必要もない。したがって、抑圧された人間精神のナニかを解き放つような芸術も用済みになってしまうだろう。「そんなのいけないぞ、人間じゃないぞ。超越性や崇高性について考えようではないか」ってのが本上のポストモダン批判の骨子なんですが、要するに、人間の崇高さなんてのが必要なのは、いまだ労働が終焉していないからであり、なんで労働が終焉しないかっていうと、何かしらから労働が終焉しない事由があるからなわけであって、その事由を解決しようって話と、それが解決されてないのに思いつくままに目先の動物的快楽にふけって遊び暮らすなんざイカンってのは別問題なのであって、つまるところ、「労働を終焉させるために働きましょう、あとは休みましょう」って話である。ある意味、人に抜きんでて目立ちたい系のアーティスト諸氏からすると、〈労働の終焉〉は傍迷惑な話だ。〈楽園〉には努力も才能もいらない。「アーティスト」なるセレブから「ただのやたら絵の上手い人」とかに転落しちゃったら、人生最悪である。因果なものだと同情しますが、われわれが仕事を終わらせるために働くように、アーティストもアートを終わらせるためにアートしようではありませんか。やです……よね？



うわあああ 近ドーくウーん!!?
ベチョッ
んーッ んーーッ
い…息が…息がーッ
ト…トモキくん たすけ…て
ベチョオー
た…田中っち!?
うッ!!
ムシャムシャ
うっ
うわあああーーーッ!!!
のわああああーっっっ
のちにトモキは この悲劇について 「すべてはゆとり教育のせい」と 語ったとゆー。
そうか？

『リアル・ド●クエ トモキくん〜そして全滅へ〜』（2006）抜粋
ゆとり世代のみならず、ポストモダン世代なら、誰だって学校なんか飛び出して、冒険の旅に出てみたいと夢想したはずだ！ 全滅必至だけどね。

(*1) (*4) (*9)『条件なき大学』Jacques Derrida〔著〕，西山雄二〔訳〕，有限会社月曜社，2008，p.49-50，p.16，p.55-56
(*2)『マネー崩壊――新しいコミュニティ通貨の誕生』Bernard A. Lietae〔著〕, 小林一紀，福元初男〔訳〕，株式会社日本経済評論社，2000，p.11
(*3)『VIEW21』高校版 2014 年度 2 月号，ベネッセ教育総合研究所，p.54-55
(*5) デリダの「毒＝薬」le pharmakon。「毒であると同時に薬、しかも、そのいずれでもなく、可能ないかなる和解も飽和もないままに汚染させ、同時にあらゆる意味と価値の二元的対立を毒する」（リュセット・フュナス）。叢書・ウニベルシタス 281『他者の言語――ダリダの日本講演』Jacques Derrida〔著〕，高橋允昭〔訳〕，法政大学出版局，1989，p.383
(*6) 叢書ウニベルシタス 590『絵画における真理 上』acques Derrida〔著〕，高橋允昭，阿部宏慈〔訳〕，法政大学出版局，1997，P45-46
(*7) 津田均『ヴィトゲンシュタインの哲学は精神病理学に何をもたらすか』（第 57 回日本病跡学会総会，2010 年 4 月 23 日）
(*8)PHP 新書 462『〈ポストモダン〉とは何だったのか―1983-2007』本上まもる〔著〕，PHP 研究所，2007，p.159-160，195-196

服部洋介　Yousuke Hattori
1976 年　愛知県生まれ　長野市在住
文学学士（歴史学）
yhattori@helen.ocn.ne.jp
http://www.facebook.com/yousuke.hattori.14

わたしのあたまのなか

Makiko Kuroiwa 1984 ~
黒岩万紀子

あらゆる煩悩を捨てて
無（む）の私でいよう

なにもかんじない。
かんじないから、痛くない。
味わうこともしなくていい。
先のことなんて考えなくていいの。
心配しなくていいの。

たとえば
くるまを運転するときは
目的地まで集中するの。

あたりまえ？

でも、あなたはできているの？

あなたをじゃますするもの、あたまのなかに出てこないの？

わたしはよく出てくるのよ。

楽しいことは

いくらでも味わおう。

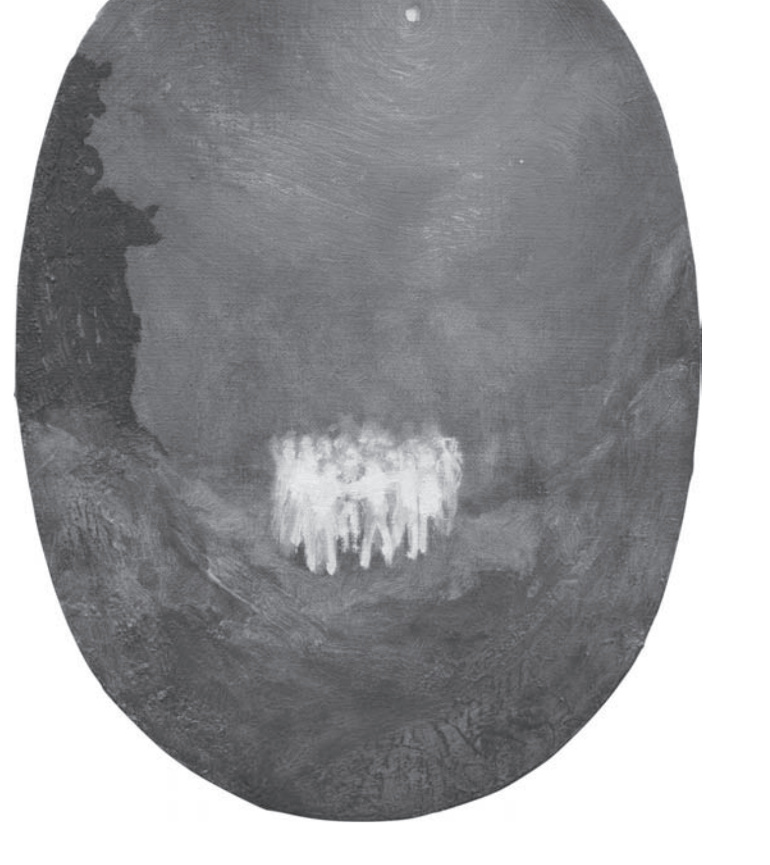
頭の中を楽（らく）で充たそう。

明日が来る保証はないのだから。
あしたがくるほしょうはないのだから。

黒岩万紀子　Makiko Kuroiwa
1984 年長野市生まれ
会社員

藝術を解さない人＝死人

Tomoro KAWAI 1976 ~
川合朋郎



人々は議論に夢中で誰も自然の美しさに気づかない
333×242 mm　油彩／キャンバス 2015

野生を忘れてしまった人類だからこそ藝術を探求する

雷を描きたいと轟音のなか戸外へ出て稲妻に打たれて死ぬのか

川合朋郎 Tomoro Kawai
1976 年大阪出身 画家
東京藝術大学大学院修了
http://tomorokawai.com
展覧会情報
6 月 3 日〜 13 日（日曜休み）ニッチギャラリー　東京 / 銀座
8 月 1 日〜 30 日（火曜休み）TOPOS highland 長野 / 飯綱東高原

分枝 branching
http://branching.jp
branching 13 publish : 09,June,2015